



徳成寺 寺ともから版 第143号 2018年11月



いつもありがとうございます。住職の大山です。

宗教学者で浄土真宗僧侶の釋徹宗さんは、「お寺の普段使い」を勧めておられます。「滅多に近寄らないので、敷居が高く感じたり高くつくような気がするのだ」とも仰います。「普段の生活」の只中で歩める仏教という性格を持つ浄土真宗ならではの、言いうる事です。

発行責任者
住職
大山健児
坊主
大山ひとみ

これも親鸞聖人のおかげです。いろんな仏教があるけれど、いつでも、どこでも、どなたにも歩める仏教こそ本当の仏教だと名のられたのです。ここにみんなの仏教が誕生しました。本来とても有難いはずなのに、またいつの間にか暮らしかから遠く隔たってしまったようです。もう一度皆さん自身にお選び頂けるよう、傍らにそっと寄り添いたいと思います。どうぞ親鸞聖人報恩講にお参り下さい。お待ちしております。



*子供おつとめ本を、ご希望の方はご一報下さい。

大山超世の耳を澄ませば

いつもお世話になってます。長男です。

先月末、私宛にお手紙を頂いたので、お返事を出しました。

改まった手紙を書くことが初めてで、人並みには文章を書いているつもりでしたが、手紙と言うのも書いてみないと書き方がわからないものです。

さて、手紙と言えば2002年にリリースされた宇多田ヒカルの楽曲で「letters」と言う曲があります。お母さんの事を歌った歌詞だそうなので、手紙を送った今聞くと、飾らずにありのままの言葉で表現する事の難しさを感じました。秋が暮れ行く今日この頃のアンニュイな雰囲気のある楽曲です。ぜひ聴いてみてください。

